土屋正義編輯

繪本石山軍記

第二編

三

遠藤へ
2269
13

繪本石山軍記第二編卷之三目録

○鈴木重幸烏飼堤に味方の敗を聽く
并ニ秀吉重幸陣頭に舌戰を
○本願寺の廻帖諸方門徒を動ス
并ニ勢州長島門徒一揆を企ル

越前大野郡
賢松寺

遠14
2269
13

○浅井長政本願寺に援兵を憑む

注一 鎌の刄の城門徒より攻る

○義景敵軍を避て大野郡東雲寺に潜む

注二 義景賢松寺に入て自盡す

○木下深策降人を以て越前を任す

注三 長政妻子を織田家に送る

繪本石山軍記貳編卷之參

土屋正義 編輯

○鈴木重幸鳥飼堤に味方の敗を聽き秀吉重幸陣頭に舌戰を

偖も石山本願寺に於て軍師鈴木源左衛門重幸今日の追討心に染ぬ

ど諸將只顧擧て出軍せるに止事を得ず計策施せども一向心神安からぬ

して獨心を悶(居られなるを)処詮俺出城かさぞしてい安危の程心元なしと

て俄に五百余人の手勢を引具し重代の鎧卯の花威乃黄に反しとるを

拿て投掛白星乃兜を着し黒乃駒に打跨りて螺鈿柄の鎗を引提つ石

山城の搆へを駈出行程三里余川續きなる鳥飼堤に到る処に落武者追々

に馳戻り味方の敗軍上原今井の陣死逐一注進なしに々まで重幸驚歎

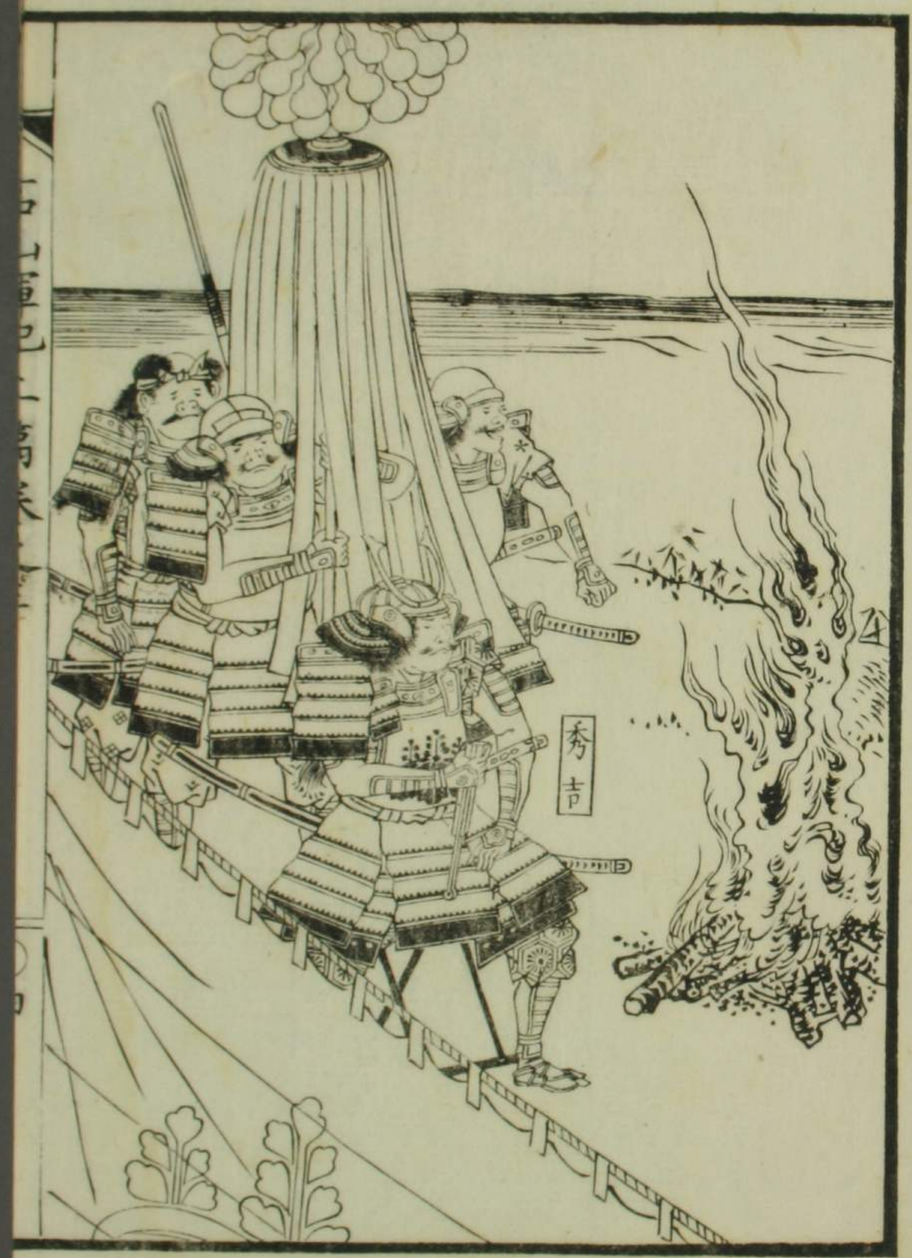
する縡大方あらに俺危踏を用ひも斯る次第皆軍師の詞に背ける謂く併乍ら織田の臣下に於て侘の如き軍配を爲ハ誰や是皆ぞ猿冠者木下あらん去追懸て打崩さんと一鞭くまそて駈出るを鈴木が一族に川島浪之助ある者鑣に縋つて止めて曰く軍師初めより這軍をハ追縡勿れと止め給ひしに無謀の將卒等時亙を辨せも追討懸て敗を把とり是軍師の先言用ひぬ罪ゑ然るを軍師何の部索もなく自ら敵の後追給ふ縡つやく尓意を解せぞ候ふ大切の御躬止り給へと稟しけまど重幸莞尓打笑ひて是所謂兵家の虚實の進退前に味方に追んぞる心有敵に追れまじと謂心あり這謂に追討懸る共利なし今既に終日の軍散ど敵味方共追討追討るゝ心なし該不意を計つて追討んに復勝ずと云縡有べらゝび者ども俺に續けと云捨てましぐらに駈出しゝ川島も尓所理に伏從して同勢五百余騎砂烟を上けて鳥飼堤を逐懸行に尓鳥の申の刻過る塡山崎の此方関戸院にぞ駈來りける茲に織田方の後殿ある荒木攝津守村重が引行同勢ふぞ追着て石山方言の問答にも逮ぐぞ哄と喚ぞ突て入れば思ひ懸ぬき荒木が一軍我戰らんと踏止まる者なく軍勞れの黄昏脚に驚き騒ひぞ討倒々く者仕て遣さうと石山勢ハ突伏斬伏手當る任せに將卒七十餘人討取にゝり荒木村重大きに怒つて那的なれば俺軍中へ乱妨ゝ法外狼藉奇怪至極一々芋刺にせん覚悟ひろげと逃る味方を目にも懸ぞ陣前に馬乘出して乱賊の張本ハ那奴なりや名の無縡ハ有べらゝび名乘て出よと呼はゞ重幸も陣頭に馬駈出しゝ尓問々ら荒木攝津殿あらん徒稟ぞ某ハ紀刄藤白の住人

鈴木源左エ門重幸之卒見泰と云も敢ず鎗を捻て突懸るにぞ村重受流して打笑ひ偖ハ聞逮ぶ石山の軍師鈴木重幸相敵に不足なし突殺して高名に備へんと双方鎗先打合つく外せば振込突ハ刎除互に手練の秘術を竭して半時計り戰ひ々まを共勝負の果しハ看へざりけり固より村重剛將なれど鈴木と一突にせんと思ひしに重幸の鎗術飛鳥の如く繰出す穂鋒目に遮らぬ除ひ損じて荒木村重兜の吹返しと突徹されて驚く外こに思いぶも馬より撞地落さりけるを重幸得さりと鎗把直し下突に刺留んとすると荒木が郎等五六十人駈集り主を救ひ逃退くにぞ大將恁ろ轉末に逮ぶ從兵爭ら怺へつぎ嵐に木の葉の散行如く四方八方へ敗走あけり重幸猶も味方を励し逃行敵に逐縋つて山崎の郷稍落まて駈寄つく前

向を屹と瞻望れハ四明寺村の手前乃方に一群隊伍堅め〻軍勢あり金の瓢簞馬印〻を陣前に高く押立させ箭を焚せて四面を明らめ木下秀吉林儿に係り重幸が近寄を看礑と眄付夫へ来るハ石山に篭れる鈴木源左エ門重幸なるぞや汝天道に逆ひ人望に叛き僧徒の爲すべき軍を勸め治を妨げ亂を好ミ〻処行悪逆無道義俠と思ふや天地神明の怒を受て却て宗門退轉を望むに當れり今や秀吉が謀中に陷り歸をべき尓方ゐ〻孫共信長汝が有能を惜まれ故意宥〻て石山へ引〻めん前非を悔ミて降を乞ふ汝等如きの分際を以て四海に羽打信長公をば追討せなど〻ハ推参千万早く歸つて自非を考へ如法の極意を探索せと大音ふこそ呼ハり々れば重幸最前より馬を立て寂秀吉が容貌を相るに天停

城州山崎ふ智勇の両将合戦図

重幸



開きて鼻梁太く額に三線の皺を見て眉高く目は猿眼ふ瞳人を射る面色赤らゝ腮窄とう鬢低く唇大きく小男なれ共威高くして天性君主の徳備つゝれば道の重幸も心に感嘆し且亦云処理なきに非ず伏して引取ざやと思ひ久るゞ這儘一言の應答もなさでら味方の英氣を失ふべしとて聲高やうに打笑つて曰く人を征せんと思へば先己を征せ汝人の悪を責ると知て自ら悪を改むる綽を知ぞ信長の姦雄假に将軍を楯と〻親族縁家も仇讐として処領を奪ひ自立を極め竟に天下を併呑せん心あり看るや久〻〻び将軍を失ひ一回威勢を震ふと雖も躬を亡し家名も断絶せん汝斯る姦邪の信長を扶け僧を殺し堂舎を絶せ豈之を善人の所業と謂んや弱きを扶け強きを凌く倭魂特る英傑の心は汝們が知る処に非ずと言を放つて罵りけるゞ秀吉返答もなく立上り愚人に對して論判無益と乘替の馬曳寄て鎗りと打乗再て戰場に對面せんと看向も遣ぞ優々として京地をきして登らるけるゞ鈴木重幸も馬立直し兵卒隨へ徐々歩行石山城へと歸られみゝり双方智勇兼備の名將敵も味方も是を看て感ぜぬ的こそ無りゝる

編者茲に断りを演て曰く自是信長江州宇佐山に発向あり這地処の城將として信長の舎弟九郎信治へ前に森三左エ門尉可成を差添へ逞兵屬て護らせゝると浅井朝倉の兩軍叡嶽に據只一戰に宇佐山を陷入信治可成主從力竭きて竟に戰死に逮びけるゞ信長殊に歎くゞ憤怒り山門の衆徒へ説得を入て將軍家へ隨はせんと爲ども衆

徒們曾て勧めに應ぜず剰へ照光坊と云る沙門門徒一揆を勧め企て江州観音寺山箕作の空城に取籠りて織田家に敵を這他江州路有謂戰爭の本傳石山に携らぬ譚い定限猪紙の有に憚り皆悉く之を省きぬ看官之を免して御覧すべし

序に曰く摂州野田福島に楯籠る三好が一黨の軍兵們い長柄江乃石火砲に撃摧れ許多の人數損じけるゞ退陣あるる織田信長を悪病神の如く魔恐れ猶亦不意に寄もやせんと四國路うして援助の兵卒五千餘り着到るせども已に軍の後辺に逮びて日々兵粮のゝ費立ば凭てい篭城持堪へぐうと那の仕出しうる働きもなく新城守衛の兵も置き殘き出城して舩に把乗尻に帆懸して追手風に出合ぬ裡にと數艘と浮て僉々本國へ引歸しけるとぞ依之摂河暫く平穏なり

○本願寺乃廻帖諸方の門徒を動き并三勢劣長嶋門徒一揆を企つ

再説摂州石山本願寺いい浅井朝倉江州へ出張せうう信長忽ち大軍の圍ゝを解て江州の地へ退去せうゞ上人を始め上下の僧俗暫く安堵の思ひとなるぬ時に下間頼廉の稟けるい信長大軍を以て兩家浅井朝倉を圍ゝ數日對陣のうう聴逮べり原來當山の憑ゝに應ず態々出張せらるゞ縛るゝ余処に看爲んい本意に非ず依て江州阪本に後詰ず兩家の勢と前後を挾ゝ力を戮して攻討あゞ信長如何程勇猛へとも滅亡せん縛必然へと取々評議有々る処へ朝倉義景うう使者を以て稟ず越れる小趣きいい本願寺の怨信長を討て宗門の障碍を断い此期へ早々軍馬を發せ

らも信長の尾を討崩さるべし越前の大軍は其頭を討破り不道の信長を誅せんと告何方も所理と承伏して先軍師重幸に伺はんと云這時重幸は廿七日の軍に味方敗走しるを恥けん俺部舎に閉蟄り居て評議の席へも出ざりるに上人自ら重幸が部舎に至り軍師は此程の敗軍を一身に引受篭り御座る條其謂なく覚へ候と勝敗は兵家の常とや聞逮べり況や兵卒們我意に乗し軍師の止むを背きて無謀の軍して敗を索めぬ軍師寛大に罪を咎め給ひぞ是尓群の幸甚なるべし奚ぞ自ら恥る絆有んやと掌を拿て廣室へ誘ひ給ひ偖坂本の後詰の軍勢を出せう否やと問せ給へば重幸謹んで言上する様は如何も信長を討取時節へ然も共豫て信長にも四國の三好亦當山より攻來るべくも計り難しと遠廻しに尓要慎を附て河内の高屋には畠山範高若江の城には三好義継富に目附の為篭せ置當國には伊丹兵庫頭親興塩川伯耆守國満池田筑後守勝政荒木摂津守村重茨木佐渡守等は皆是無二の織田方にして各士居城に楯篭りて倘事あん有は支へんとて太叢に構へしは容易兵卒往来はあるぞ然ばこそ彼三好ら黨も四方敵地に挾まれしとれば折角築きし城を棄て四國の旧巣へ逃帰りしに某乃先存ずる手段は軍馬を馳て後詰とも控へ信を憑こて敵を悩せ當山篭城の兵士を減せぬ一個の秘計を設けて候ふ夫は亦如何ある手段と謂へば上人より諸國の末寺門徒へ信長往返の背を責て法敵退治すべき旨を御印證の廻文を遣はせば四面近國へ觸給ひあべ諸方の門徒一時に蜂起して三家江西に對戰の最中

近國之を知らざる的なり直ふ信長を襲ふ必定當山より後詰せよりハ信長殊更難澁とるべし這議軍策乃他力本願御開山への奉公なるぞや何方も違背ハ致すべからぞと思ふ處を言上せしかば上人始め一座の衆々實々是こそ妙計へとて即刻廻文を認め御印證有て諸國末寺門徒へ觸しなふ依之伊勢近江山城丹波伊賀大和路の門徒の僧俗宗門一揆の組々整へ坂本へ責到らんとぞ閃きける其騒動亦言ん方なし就中勢劫長島長圓寺と云ハ頗る大地にて擅越多く忽ち數千の大兵を聚め長圓寺中に楯籠つ貴賤老若とも男なる者ハ戰ひに臨て後れを把る女なる者ハ水仕の手業を報恩謝德と心を一致し佛敵退治を祈るべきぞと僉一向に誓詞を立させ先北伊勢の郷里を放火し或ひハ砦を攻落して濫妨暴激大方なるぞ威究めて強大なるより織田家の長臣滝川一益勢州警固の總憲司として疾より桑名に在城せしかば軍勢を出し押へんと爲共門徒の一揆們勢ひ烈しく手強く及向ひ屈せざるべ流石の滝川も持撫ねて度々の敗走把とりなまじ居城桑名を落さるるしと只打籠りて防戰るし又尾州小消村と云地にハ信長足溜りの城を築くを舍弟織田彦七郎信興を以て城主として篭置きしと一揆の者們多勢を以て不意を計つて押寄つて晝夜隙なく攻詰なまバ信興防戰に術を盡せども外に後詰の兵も非ねば竟に總廓を攻破らるを詮方なく本丸に引入て尚も烈しく防ぎしを共門徒の一揆們勢に乘じ已に本丸へ込入暴廻る信興最早協ひ覚悟し農民們の手に討

れゐび這上もゐき弓矢の耻辱と城ゑ火と懸腹掻切て火中ゑ飛入亡給ひゐる御内の家臣悉く討て出残らぢ亂軍に陣死るを時に元亀元年十月十二日の綷々とよ此旨信長へ注進しけるとゝ信治と云信興と云御舍弟一時に二人を失ゐひ剛氣の信長も骨肉の御別深く哭給ひゐるゞ自是百倍に門徒を悪まれ同胞の怨敵門徒の奴原根を断さして置べきやなと執念憎く憤られしゝ斯る意恨の累ゐる謂へ

自是續まて江刄の地に信長朝倉浅井と一戦に逮び尓他佐々木兼禎歸順の綷信長山門の衆徒を悪む起原朝倉浅井織田の三家一且和平に及ひ亦破る〻綷総て木下藤吉郎ゞ智略を以て主君歸國せしむる綷本傳石山外事の話ゆゑ茲に省略して之を云ぢ且話説綷繁々れゞ

○浅井長政本願寺に援兵を憑む并ニ鎌の刄の城門徒ゐ攻る

去程に織田信長公に於てハ謀臣木下藤吉郎の智に隨ひ叡嶽滞陣の朝倉浅井と天朝勅命の和睦を乞受故意江濃の通路を開らせ主君信長歸國の道條門徒一揆も有しゝめざる様無事に岐阜へと帰城在々り朝倉浅井も軍勢卒ひて各本國へ帰城に逮びぬ然ハ是皆木下ゞ計略ひて倘三家爭戰の最中へ向門徒の一揆們兩家に與して織田の後を狹まる時ハ忌々しき大敗招きやせんとて天朝の御扱ひを乞ひて偖て和睦に治めしりけり是尓年十二月中旬の綷へ信長原來表裏の大将へ木下ハ亦智謀に富て凡智の逮ぶ名臣ゐるゝび密に信長公へ稟して浅井長政の股肱乃臣ゐる江州佐和山磯根の城守とゐる磯野丹波守秀昌とび丹羽長

秀吉して勧め辺信長の方へ帰従ゐさせ〜め佐和山の処領を高嶋に換へ佐和山を丹羽入替て守〜め磯野ハ高島へぞ引移りぬ総て小執計ひ信長主従浅井家と有て無ゞ如く自儘云様も非ざりゝとぞ浅井久政父子之を聴て大ひふ怒つて稟さゝるハ偖々信長の心悪虎狼に勝まり和平誓紙も人を欺謀く小兒を哆せる飴菓に等〜〜磯野を抱込仕方の上ハ破約を示せ〜手切の證據先磯野より〜て恨を看せんと豫て秀昌より人質として小谷の城中へ取置さる秀昌の老母を引出〜て秀昌織田家に唆かさゝて佐和山の城を明渡〜織田に降て主家を看放つ秀昌の不義不忠を言聴〜て竟に老母を城外に於て無慙にも磔にぞけらる〜偖亦摂州石山本願寺にハ軍師重幸の手段に違ひぞ上人指揮の廻帖を馳て諸方の門徒蜂起せ〜め江州阪本に在陣せ〜織田信長を討平げよとて世評を流〜て徒黨の者們諸方郷里に會合の趣何首に一揆を企つとも知ぞ信長心安堵ぬ処へ舎弟信興主従小消の城に一揆の爲に滅亡の次弟滝川一益も一揆乃暴威に之を征〜うて桑名に篭居せ〜織田の援兵を候との風説是等に依て工夫を巡ら〜天朝に奏〜勅命を戴き勅使を受て和平を結び三家誓紙を把うて各々陣を拂ひて帰國の趣き委細に本願寺へ聴へけるハ上人を始め下間以下諸将の衆中も僉議果て左右の議論もせざりゝるゞ軍師重幸膝を擲いて嘆ぜて曰く噫抵き哉朝倉義景愚なる哉浅井長政奚ぞ叡嶽に越年〜て信長の軍を喰止ざるにや而〜て四國摂津を始め諸國の諸侯味方に招き先に

征夷府を擒とゝして續ひて坂本へ攻詰るハ信長疲る〻軍勢を以て如何程防禦を竭すとても敗軍せるべんべ有べ〻〻〻甘味謀つて討めるべ信長得とて道すまゞきに童の喧嘩ゐもゞ如く和睦に欺さる陣を拂つて帰國せ〻とゝ作麼笑ふ堪とり看るや兩家共信長の爲め茲一兩年の内滅亡すべ〻是兵を用ゆるに疎きゆへ自国を愛〻て自国を失ふ聞も齒がゆき繆共〻と苦笑ひつ〻嘆息〻それば上人主從も人的論に感〻て如何様朝倉淺井の不勘考利軍の時節を外せる段軍師の監察違ふべ〻〻ぞと一同遺り惜く思ひるるとぞ竟に余年も早暮果て明るべ元亀二年辛未乃新玉の青陽を迎ふに到りて干戈の勞〻も暫く穏止石山本願寺も静へ〻〻ゞ江州小谷淺井久政父子ハ去冬〻天朝より

の御扱ひよ依て織田と和親と結べる間もなく信長何の趣意も咎へと磯野丹波守を家臣に扯込佐和山城を入替らせつ〻江西高島の城へ磯野を移らゝ佐和山に丹羽長秀を入置淺井の領地を縮め減せハ久政父子如何ぞ悠ふべけん和睦と云ハ名計りに〻て淺井を打絶すべきの奸謀なるよ共暁さ〻て勅意に恐惶信長の姦策に乗〻とそ無念遮莫安閑と観てゆ在べき爲こそ有と密使を立て石山本願寺へ頼こ来り信長の反覆を語り告て再援助を乞に〻るべ上人重幸と高議〻給ひ江北乃末寺門徒へ向御指揮の廻帖逓與給ふ使者歓びつ〻帰国して久政父子へ手遞与〻るべ直ちに這回帖を以て軍勢を乞る〻本山と謂領主の憑〻殊に宗敵の信長るるべ僉議〻〻義諾〻て馳集る小

面々末寺にハ坂田郡箕浦の誓願寺僧俗混じて四千餘人高島郡新庄の金光寺僧俗混じて二千餘人同郡朽木の常願寺僧俗混じて千五百餘人坂田郡東上阪の順慶寺僧俗混じて五百余人郡不詳由須木の清願寺僧俗混じて二千余人伊香郡木の本乃信敬坊僧俗混じて五百余人浅井郡益田の真宗寺僧俗混じて三千余人郡不詳唐川の超照寺僧俗混じて八百余人郡不詳長澤の福田寺僧俗混じて四千余人坂田郡下坂の福照寺僧俗混じて三千余人都合其勢二万余人之恰ら蜜蜂の如く起り浅井の味方に参りしハ長政父子深く感悦して先織田方より搆へ置しる堀の治郎の植篭りなる鎌の刄の城を攻落し手初め高名に備へんとて家臣浅井七郎野村兵庫頭中島日向守三士を軍奉行として相副させ

元亀二年五月六日箕浦誓願寺を先鋒として民家を放火し町家を壊ち一揆の總勢二万餘人鎌の刄乃城へ押寄つ稲麻竹園に取巻て喚き叫んで攻附なべ城主堀の治郎康清ハ未だ幼年にして後見なる多羅尾右近樋口三郎兵衛門屢粉骨を盡し防ぐと雖も敵ハ目に餘る大軍之地下人なども入替々々息を継せず攻々る程に城兵五百人許り篭りしなど寡勢豈衆に敵すべけんや殆危く看へにくなべ横山江州伊香郡乃城主木下藤吉郎此綟を聽て安心なるなど鎌の刄ハ味方の屬城なれ彼首を攻落されて協ふまじ後詰せずやと思ふ処に折節兵士此ハ二千に足ぬ僅に八百余人を引卒し横山を出城して味方に曰く敵大軍と雖も郷民門中に野武士も有つるんが大将ハ何方も一向宗門耳に數珠

鎌の双城合戦門徒の一揆敗軍の図

と掛る坊主們之兵家に非ぬべ軍の進退得こそ精き者有べうに唯追崩して駈散せよ土ほぜりの郷民們が首を取共何にらせん縱横無盡に蹴殺さべーと鋭氣を着て指揮有々れば堀尾茂助櫻井小晋吾淺野弥兵衛等何も血氣盛の勇士るまべ一同承り候と回答々る秀吉再ぬて指揮して曰く味方旗指物袖印を隱し一揆の後れし体に應敵方に十分近着油断を看済し旗指物袖印をも附べきと進るも退も俺下知を守き猥に深入して敗を取ると示し度して進まれうり徒とも氣付ぬ門徒の一揆們這時過さじと塀際に押寄せ我先に乗入んとそ閃けば木下が援兵八百余人間近く來るを夢にも知ぜ適々着附し門徒勢も旗指物の着へぎりけきべ後れて來れる味方るらんと心も置ぜ答

めも做ぜ只城の方而已氣を苛ちて後方の要慎もせざりしうば既に木下が兵其間七八段許りに成々る頃五色の吹貫瓢箪の馬標颯と山風に靡し押立つ木下藤吉郎秀吉是に向ふ門徒坊主の後生違ひ念佛無間乃修羅地獄へ好んで隨度思ふぞるしうば首諸共に落して呉んと大音聲に呼はりつ逞兵八百余人雁行に隊へ潮の湧が如く後を塞ぎ箕浦誓願寺が勢の中へ無二無三に突て入る中にも堀尾茂助櫻井小晋吾淺野弥兵衛蜂須賀又左エ門衆兵を抽で働きくるまべ宛ら羊を追立猛虎の勢面々手練の滅多斬に忽ち十四人を打倒しに々り次に隊へ長澤福田寺の中陣目ざして切て入れば御民們ハ狼狽噪ぎて勇士の刃先敵し難く是も瞬く間に二十余人箕を亂して打倒され右往左往に敗走るを偖其次み

る福照寺ゞ三千余人の郷民們入替つて戰ひんと爲るに福田寺の敗兵們ゞ雪頽懸るに支へられて俱に直崩れゝ敗退く秀吉是等と追棄にさせ益田真宗寺ゞ隊に向ひ哄と喚いて突て入獅々憤勇の勢見い〜雜つ捲りつ斬立突伏茲を專途と打戰へば一揆們ハ肝を寒〜して偖も手苛き木下勢ゞか人參喫て首縊るとも猿に首とび取とかとて敗足早き郷民們真宗寺ゞ指揮も用ひず踏止るべきの氣勢もなく散々に崩れ立て敗亂る〜木下勢ハ勝に乘じて衝と敵の中を駈通りて次に隊へ〜清願寺ゞ三千余人を斬て廻るとび総軍皆々打敗らるゝ清願寺勢も早氣後もして混多に成て平崩もせり後に續き〜上阪順慶寺臆病風ふや搦とれゝん逃るに奚ぞ引把るべきとて一支の應ひもなく御七夜參

詣の同行ゞで人數を憑〜に逃出〜ゝるとび一揆の寄手引色看るより多羅尾右近樋口の兩將須乎木下に力を戮せと五百余騎真黑に成て打て出箕浦の門徒を斬捲り木下勢と一手に合併して逃行敵を追立駈立下阪表の潮際邊まで嚴〜く追討懸るけり然共門徒方も大兵なれバ五千余人の勢を纏めて再び鎌の刄へ把て返〜木下堀ゞ兩勢を追詰必死と成て闘戰る爰に堀治郎ゞ郎等に二川平左ヱ門と云ふ勇兵あり前刻よりの血戰ゆて太刀も鎗も打折つ趨り廻つて近寄敵を左右の腕にゝ掴ゝて人礫として投付々々暴に暴立ゝ大力量に一揆の僧俗舌を卷て噫冷〜の猛者ゆる哉僉近着て投殺されゝと門徒勢恐れて後踐巡ハ順慶寺ゞ着て大きに怒り臆〜とる味方の行狀

ゞ渠奴烏獲の力量有共奚ぞ討倒さに難うらんや去俺炮術に仕留
看せんと二つ玉込うる鳥銃とめて狙ひを究て撞と放せバ二川の運命や
竭うりけん銃丸胸板を撃貫れ黒血を吐て倒るゝ死ゝうり城将多羅尾
右近是を看るゝうり悪き芋穿坊主奴其処動くゝと大刄の鑓を引ぞご
きて順慶寺に突て懸れバ此方も騒ゞぞ鎗打合ゝて人交もせぞ戰ひ々
るゞ多羅尾ゞ武勇や勝りゝ々ん順慶寺を馬上より突落ゝ竟に首を
把て指上ゝうり其他城方の勇士るる林甚之丞と云る者も這一揆亂ふ
陣死すれバ門徒勢にも剛名るる藤田又右エ門加島助七ゝんど憑さに
思ふ者十余個乱軍の中に陣死ゝて引色立て看へるるにぞ木下藤吉
郎糸配振立突崩ぞき鹽合ゝるぞ進めや進めと指揮せゝうバ木下

ゞ郎等淺野弥兵衛蜂須賀又左エ門稲田大炊櫻井小晋吾堀尾茂
助中村孫平治の徒鋒先揃へて斬立薙立七烈八摧に打て廻れ一揆の総
勢竟に恊つぞ我先にと敗走るを駈立追立斬伏々まバ討取るゝ敵兵
九百八十余人堀木下ハ勝閧上て双方居城へ凱陣ゝ秀吉ハ討聚首
級共を城に歸りて後實撿するに何方も土俗鄙僧の類るまバ主君の御
覽に入るに逮ぞ唯合戰せゝ證にとて耳鼻を則劓て使者に付信長
の居城へ注進せゝうバ信長軍の次弟を聞ゝ召て秀吉ハ智謀のに非
ぞ能く軍法の故實を辨へ馘の式まで心得ゝるハ近曾得難き武士と
て屢称美ゝ給ひるとぞ
自是勢刄長島一揆の話信長敵嶽を悪まるゝ譯淺井朝倉織田の

三家倍國郡取合の戰爭竟ふ元亀二年九月十二日信長淺井朝倉と
閣き叡嶽延暦寺に迫つて山門悉く燒亡せ〜ふ續いて木下の智辨
と以て淺井家の勇將とする宮部善祥坊と屈伏かさ〜ふ自夫江
北虎御前山に於て三家（淺井朝倉織田）數日の合戰と成朝倉義景家臣乃
勸めに任せ本國へ還陣ありしより淺井方利軍の時向ふと雖も始終
に謀略合期せざれば毎う勝利を得〜軍もなく朝倉家にも變心の家
臣有て兩家武威漸々に衰ふふ到る然るに京都にてハ新將軍足利
義昭公隱謀企られ信長の武德盛大なると妬く足利再興の周旋も
忘却〜給ひ元亀四年（今年天正元年と改る）十二月江州石山堅田に砦を構へ專拒抗
の備へ付給ふと雖織田方の勇兵一戰に陷〜宇治槙の島へ御動座有

とも果々敷戰ひもなく河州若江の城主なりける三好義継を御依
賴ありしかば是迎も威ひ微少にして中々織田の大軍に敵〜難く此
上ハ石山本願寺に便りて中國毛利三家を憑まゞやと本願寺顯如
上人を憑まる上人諾して公を迎請〜暫く石山に御滯留の後竟
ふ中國の方へ没落〜給ふ緯是利將軍數世の職分斷然として此
時に滅亡せ義昭京洛を退りまして天下の武權愈織田に歸〜
淺井朝倉の兩家に於も賴くふ思ふ肱股の郎等或ひハ時世を考へ
主を疎く或ひハ秀吉の智術に乘らる大半織田家ふ降て幕下に
屬せ這謂に百戰百勝織田の利と成り處領の地面ハ削るく許り軍威
も朝日に霜雪消るら如く織田の破竹の勢加り淺井朝倉ハ烏べ

き様なく無念と惚て烏と過しける総て右數箇條の話説ハ本傳石山軍記の外戰ふて元亀二年より同四年八九ヶ月に懸るまでの諸処戰亂乃譯拵るれど石山一件に抱つらされバ省略して巻中に載ず這下淺井朝倉織田の戰ひハ已に兩家朝倉淺井勢ひ窮りて滅亡乃敗戰と次に出のく本傳石山の緒後に問ハ看官恕して云と答めそ

○義景敵軍を避て大野郡東雲寺に潜む并義景賢松寺に入て自盡せ

天正元年癸酉八月十四日越前朝倉義景の軍と岐阜織田信長の大軍と江越兩國の境界なる刀稱坂峠の合戰起りて朝倉方大敗に逮びけるハ勇士の兵卒數多陣死し依之織田の大軍ハ嶮岨の山道を物とも せず勢猛く追蒐る程に朝倉義景茲に到て疋田木目の兩城に

も持惚ゆべき兵士なるく田神山の陣を出て夜路を蒐り同國敦賀の城へ引退る（田神山より敦賀まで行程十里）辛して暫く虎口を避られる偖織田方ハ刀祢坂の戰ひ勝利十分して敵を討縛首數三千八百餘級を得る且城々ハ金ヶ崎疋田山中堅石木目鉢伏等城將降伏して城開渡を慌て十四日の末の剋に織田の先鋒敦賀に押寄ハ江刀大岳の戰場より這敦賀までの其路次に朝倉勢の討取られる士卒屍連々と倒まて斷間なく實に當國人絶すべく思ひて義景ハ日に敦賀を退き同國府中に身を避るゝ附蜀る家臣も寡ふく十五日本城一乘谷へ帰られ一族郎從大方陣死して便なや孤獨の土將となれバ居城に入ても心安まらぶ是ハ全く戰爭の罪にも非ず朝倉家傾覆の時節と唯

心閑に自殺を遂んと累代の重寶ども悉く燒棄大野郡亥山の城と
謂へ老臣朝倉義鏡の居城みて幽栖深谷の山城なれバ要時敵軍亥山
にて除緩々自殺なさん物と十六日の夕陽に逮ひて十個許の家臣
を引卒亥山とさして落られなるハ最も哀れの成行くなり大將既に累
代居住せし鐵城金殿堅固を盡を一乘ヶ谷の城廓を離れ大野の山懷
へ恐ごごとうと近郷へ聞ゆると齊しく領民の的們噪ぎ出して國中の
動亂云樣もなし茲に義景に女子兩人あり一個ハ石山本願寺なる顯如
上人の御長男なる教如上人乃御令室の約あり依之乳母夫福岡石見
守幼女土兩方救ひ進らせ悍々敷御供し奉り石山へ送り入りしとて
偖義景に一乘ヶ谷より亥山へ行程五里乃山路漸く小夜亥の刻に

到り亥山の此方なる東雲寺と云山利に蹶り着平泉寺大野郡の衆徒
と頼こふ思ひ先その意を引着んとて消息を認め送られなるに是ハ
如何に平泉寺の衆徒們も織田信長乃令命と以て木下藤吉郎より
使者と立平泉寺へ黄金許多寄附なしなく義景長政違勅の條々數
へ立因是兩家征伐に逮ぶなり倘貴寺義景舊來師檀の睦こ今般好
意斷然なくして朝倉へ同心抗拒せらる則ハ去秋叡嶽燒亡の例に倣ひ
堂塔伽藍と盡滅せしめ僧徒殘りなく誅戮せん心得違ひ有べらしとて
使者と以て說諭せしハ平泉寺の衆徒們大きに恐怖て忽ち織田
方に打靡きなれハ今義景の使者來ると雖も衆徒們敢て對面もせ
ず且消息の回答にも逮ぶず剰へ年若き衆徒們ハ商議して蜂起と

企て亥山の近邊を放火しけるぞ城主景鏡も仰天して如何はせんと
悶擲るゝぬ偖亦信長は八月十八日（天正元癸酉）敦賀と立て府中に着陣し
龍門寺に陣を定め給ふ然るに朝倉家の老臣ある魚住備後守景固
と云ふ中河内（江州伊香郡）押への爲府中に止り居うりけるぞ義景傾運の敗戰
と看てより忽ち心變りて主家を看離ち嫡子彦三郎と敦賀へ（龍門寺）
遣りつゝ人質として降參を乞信長免して縡問給へば義景一乘ヶ谷と
退去し大野郡亥山へ逃らる縡有の儘に注進しければ去ぬ本城乘取や
とて柴田木下丹羽氏家稻葉安藤の面々一乘ヶ谷へと進發せ亦朝倉
三郎景胤同く孫三郎景健兩人も是迄諸処の合戰に屢武功の忠
戰盡し木の目峠乃出軍までも主君義景に從ひ居しが味方の勇臣

僉變心を生し大半織田家に降參しけるぞ忠臣二君に仕ずと云も早
竟平の時なる諭と成て今當に一族没落の時に逮び義心金鐵の忠節
に思ひを敵に降つて主を看棄る浮薄の人情古今變りなし却て小祿
小身乃士に忠義あり故に大祿に飽滿るまを俗に祿盗賊と卑むる
も斯る時節にこそ分明まべし さしも忠貞堅剛乃景胤景健も終末
の本意を全ふせを織田方に降りて幕下に屬を加夫朝倉式部大輔景
鏡と織田の老臣稻葉一徹齋とに奮來入魂るせる間くしぞ信長豫て
之を知しめ召より先景鏡を欺謀引入んとて一徹齋を以て景鏡の許へ信
長の内命を稟させるに義景こそ勅命に背きしが共先祖敏景以來の
忠功もあり一跡斷絶せしむべきに非ず違勅乃悔須を亡して先祖の家

名を相續あまと飴餡甘舌を以て云せけまで景鏡も怒ちに心變りして同く十九日乃夜に入景鏡東雲寺（義景の居る寺）へ使者を遣ひし誠しやうに欺きて曰様其山院ハ交山に程遠く総て密談最不便利に候ふ急き今甲夜の裡山田の莊六坊賢松寺へ御轉座し給へ敵氣着ざる間に退せ給つと諾も實明らゝく云送りなれど義景何の心も着ぎして小川三郎左エ門尉父子同く六郎左エ門尉加藤新三郎等を召具せらるゝ賢松寺の精舎へ引退給ふ翌れハ二十日未の剋平泉寺の衆徒へ先に立式部大輔景鏡ハ六坊を把圍平岡治右エ門尉と使とゝて主君義景へ稟し入る様ハ敵奈何して尋ね知候ふ由や早多勢を以て攻寄候ふ迚も遁ま給ふに術計盡ぬ御生害然るべしと云せける義景大きに憤りて曰く偖ハ俺を茲まで鉤出し欺て安々討んと做綽景鏡も敵とかりつるよか躾て主罰廻り來つて三年と安穏に置づゝべと怒の面色夜叉乃如く平岡恐れて逃出々まゞ義景ハ佛殿に走入給ひ高声に讀經念佛を唱へ心閑に帖紙へ辞世乃須を賦せらるゝ行年四十一歳とぞ聞て

七顛八倒四十年中無自無他四大本空　と記し終り直に刺刀と拔放ちて左手の腹へ突立らるゝ苦痛の呼吸をほつと吐て高橋ハ何方に居るや新三郎ハ何處ふ居ぞ早く來て介錯せよ首級を敵に把まざる様火を懸よやと呼立給へと高橋加藤ハ寺門の内へ群入敵兵防ぎ居なれハ早遠蒐來る隙もあらぢ義景自ら蠟燭を拿て障子に火と

朝倉義景
賢松寺ニ
於て自殺
ふに図
加藤新三郎

義景

差給ふ処へ加藤新三郎景益走來り這体看るゝより涙ぐゝ御苦痛
させじと介錯し介躬も腹切て死しうけり鳥井兵庫助景近高橋
新助景倍等も續きて殉死と遂訖んぬ嗚呼這烏は是如何なる烏ぞ
や朝倉敏景より五代乃繁昌夢の如くに退轉なせしは實に有爲無常
乃愁世なりけり

○木下深策降人と以て越前を任せ并に長政妻子を織田家に送る

朝倉の一族式部大輔景鏡は信長乃計略に欺られ緩心して主君を自
殺せしめ首級を把て府中に到り信長の本陣龍門寺に參上し縁由
を述て降を乞しかば信長悦喜斜ならず長谷川宗仁を召て小首級
を渡し京都へ上せ三條河原にて獄門として梟られる織田家の諸將

景鏡を悪く主を自殺させて許人なしと世に立んとなる犬畜物は
侍の看懲しに目刑戮せんと内評既に究りなると木下藤吉郎制めて曰く
浅井征伐未だ落去仕らを就中朝倉の殘黨多なるべし先少選降參の
者共へ越前の國を御預あつて國中平均に仕置仰せ付られ人氣の動
静御覧あるへし降參の者欲心の熾にして義信を知さる者共なれば
自然と利欲に相爭ひ躰て同士討の噪亂を仕出し自滅仕る綜必然な
らん是災を敵に譲りて幸を味方に得るの密策と且主を離せる不忠
の徒此方より制まる迄もなく天罰應報久しうして未前を察して
言上せしに信長理論に感心し給ひ依之小降人を撰び出まして先最初
に降參るせし大岳の城を落しる軍功抜群の手柄なれば前波九郎

兵衛吉継と云桂田播磨守長俊と改名させ越前の國の守護ぞなされ一乗が谷に差置る〻次に富田弥六郎長俊と云府中の城主とふ〻給ふ次に魚住備後守景固を鳥羽の城主とせられ〻次に溝江大炊介とゝ金津の城主とゝさせら〻る次に景鏡ハ以前の如く亥山の城主とふ〻給り偖津田九郎治郎木下介左工門明智十兵衛尉の三個を越前の三奉行とる〻て北の庄に遺〻置れ夫々の仕置相濟けゝゝ同月廿六日府中を發駕あり再江州虎御前山へ総軍歸陣ろ〻給へり尓ゝき〻ふ信長の大軍以て猛威を震ひ給ひゝるに僅十日許りの間に五代權家の朝倉を滅〻一國縮從せ〻め給ふ武徳神とや比せん鬼とや魔ん古今稀代の働きゝるれゝゝ浅井の滅亡も遠うるまゝ〻と小谷城中の者共

色を失ひ愈安き心ハあ〻ざりけり木下藤吉郎ハ豫てゝり舎弟小市郎秀長に竹中半兵衛重治をさ〻〻添逞兵千餘人を隨属〻め浅井父子乃居城の間ゝる京極廓と云地へ入置父子の援合通路を絶切さり正に篭鳥の出入るき如く朝倉勢の追討に討ゝ〻も看ゝら援る縡も恊ゝぞ徒に傍観ゝ〻居〻りけり木下藤吉郎越前より歸ゝゝ否主君信長の命を請て手勢一千五百餘人を率て舎弟秀長と一致とゝり小谷乃城を眼下に視下〻〻唯一時に攻入べきの猛威を示〻て威〻けゝゝ這手の軍将三田村左工門尉政元大野木土佐守政秀兩個木下の勢に辟易〻て迚も恊ゝ〻ゝゝや諦めけん八月廿八日の早天に局を渡〻て降参るを信長聽て勇〻〻給ひ去ハ先久政の居所を一攻せあよ

と命有々まで一晝夜息も継せず攻立つ信長の旗本とも廓に移さ
れ諸手の陣々目に瞻望し自ら八方に指揮せられける偖浅井下野
守久政ハ朝倉義景ゞ自害ゆして越前一國平均して織田家へ切従へ
由聴れ々まで久政天を仰ぎて長嘆せられ最早浅井の武運も是まで
兎死せば狐哭しと云況て縁類の朝倉浅井唇破まて齒寒しとやら
奚ぞ余処に看過さらんや亡国亡家も天の命之今更人力の逮ふ処に
非ず只終焉乃集圍とゆして弓矢の本意を失ふまし卒最期の酒莚
を催ふさんとて廣室に家臣を召集めらる中にも久政ゞ寵遇と被る鶴
松太夫と呼ぶ能師あり主君久政の玉觴を禀し受雙眼に泪を浮め
て曰く君より賜る今日ハ御盃こそ何々ようも忝く頂戴仕り候ふと

引受々々三献喫て扇を開きて立上りて○埋む木の花咲ことも無り
けり身の成果ぞ哀まゆりけりと舞しうべ一座の君臣を催し暫時盃
を巡らしけるに矢叫の聲鳥銃乃音漸々に冷まし〳〵く聞へ今ハ斯ると看へ
る程に久政躯て雙肌押脱腹一文字に切裂給ふ鶴松太夫心も剛
にて忠義撓まぬ者へ々まで甲斐々々〳〵介錯し進む久政行年五十
歳とぞ（天正元年癸酉八月廿八日卒ス）鶴松も介座に腹掻切刀の鋒咽に推當俯伏に臥し
て死しうりける家臣に東野千田西山井口の黨も今ハ何時とう期をべ
きとて敵中に入て死ぬも有ば罪造りとて屠腹もあり思ひくに死し
るもへ竟に這廓ハ落こうり今ハ長政の居住せらるゝ廓許りに成
みけまに總軍一千に打聚りて十重二十重に取圍し閧を挙て攻懸り

そう然らば城中にても浅井石見守赤尾美作守脇阪甚内木村太郎治郎浅井縫殿助田宮新七中嶋九郎治郎同く彌兵衛等何方も名誉の勇士なれば今日を最期の合戰なるぞ逢あひれて敵に笑はるると互に諫め諫めつれつ必死を究めて防ぎ戰へば寄手の織田方も攻撓容易雌雄を看へざりけり木下藤吉郎は豫てより浅井家には脇阪甚内と云る壯者有綽知るゆへ如何もして該壯者を助け抱へさく思はれ〳〵ば浅井の滅亡今日翌に迫り渠等皆ぎ主君長政共に死を同くせんと思ふ成るべ〳〵渠們を助けんと欲ふ手段には主長政の助命を謀らば余りや主より先に死もせぬ〳〵術こそ有と工夫とるして信長の御前へ參候し當城も今明日に落去仕らん該に死武者に矢い立ぎと候ふ且長政も去勇

將ぐ夫に從ふ諸士亦尋常あ〳〵ば死物狂ひに斬て出るべ味方も多く死傷仕らん因て先和睦の綽を仰せ入られ介怒氣を緩め介鋭氣を挫き厥ち重ねて如何様とも御計ひ然るべ〳〵と言上せ信長最も と聞〳〵召て不破河内守を使者として長政の方へ稟さる〳〵様は戰爭の風ひ止事を得ぬ〳〵て武門の常弓箭乃意地是迄に逮ぶは是非なき次第義景は勅錠に背き天誅を蒙り既に亡ひ候ひ訖ぬ脩劫の綽は素より信長悃望〳〵て縁者と成程の義之斯の如き讐敵を作ると雖も聊以て疎意には存ぜぬ願くは居城を退出有て存命せさせ給ふに於ては領地の綽は追々沙汰に逮ひ安堵の義を謀ふべく候ふ然有ば浅井の家名も断絶せぬ信長が本意も全く〳〵大慶是に過ずと稟〳〵送らる長

政使者に對面有て弓箭の運盡家士の的まで御陣頭へ参向して降
とゝひ累代重恩を施し慈惠を加へ肱股と憑〻〻的們まで何〻ろ反
心して看限る〻綷當家滅亡の時節到來て今更人怨むにも逮ばざれ
ば自然の退轉悔むも愚之御芳志の御使に預り長政歓悦に候へども
出城して存命を索むに未さ難戰中の間の綷〻斯打圍れて助命に遭と
も生ての恥辱遁れて詮るく永く家名の瑕瑾とあらば生を持ちて先祖
へ不孝故に死すべき時に死すんば死に倍恥辱有と候ふ但し御使に對し
未練至極近曾恥入る儀に候へども俺等年來連添荊妻は則ち信長の
爲には妹と既に一男三女を悅び候ふ是をば其御陣へ送り稟すべく宜く扶
助を惠ませ給りるべし實に子を顧ふ夜の鶴乃哀情死後の障と成候

へは是而已憑〻置候ふ此餘に稟すべき綷あるべしとて不破河内守を帰
されつ其后内室小谷の方を呼縁由を告て勸められそれば小谷の方は涙
に暮給ひ御遺命の程は重〻と雖も女は三界に家あるべしと兼ねて殿の御生
害を脇に看あるべしと長兄あざうにも敵の舘へ爭のめく帰らるべきやは俱に三
途に伴侶給ひてこそ親子夫婦の思ひ出あり親有ばこそ子も立行父に
離るゝ子を抱へて肩躬の窄る寓方人敵よ讐よと陰言云れ生甲斐もあ
き恥を晒さは浅井の家乃愈瑕瑾と親の掌を以刺殺すは最も無慈悲に
侍るあれど存命て恥搔しめんよりは世の口は端に懸らせ給ひけるを妾も
織田信秀の女あれば殿諸共に當城を去ぬ激く死を遂げ侍りるく死を
厭ふての仰せあり世ば太難面とうき口説るるく長政尚も諭して曰様你の

拒む処理りあれども往古の常盤御前を比較へ給へ良人義朝と清盛に亡され三個の稚児を躬に抱へ雪中に伏見の郷に漂流平家の侍士弥平兵衛宗清常盤の艱苦を憐を助け俺邸へ親子を連帰り此趣き清盛へ言上に逮び々まで清盛は豫て常盤の美艶を知年来密に懸想せゝゆへ今夫義朝に死別れ寓方なき躬に子供を抱へ難澁困苦に陥るを救ひ得させん上に於ては清盛日来執念ある常盤を心にぞに相従ひあら三人の小児養育なきゝめ安穏に成長ゝむへゝ倘亦該勧め違背に逮ぐ義朝清盛の人も知る敵同士敵の枝葉は根を断て葉を枯す三人の小児首打落すべゝ常盤の返答一固に有と右弥平兵衛宗清を以て常盤へ説得入に々まで誰の子の縡疎略ふ思ひん尓躬ぞに清盛へ隨ひ怨家に寄

ても子は育へゝと竟に清盛の望に應ぐ尓心ふぞ隨ひゝぐ三人乃子は皆成長るゝて上二人は出家得道ゝ末子は源九郎義經則ち是を清盛薨去の後平氏を亡ゝ父義朝の旧怨を晴せ是等常盤御前の発明な子を養ふ親の役目を假令仇家の汚食を喰とも常盤の如く子を成長させは再若樹より芽を出ゝて絶る家名を引與ゝて恥を雪むる時節も有あん夫英雄豪傑も逮ぐぬ方便は女舌の口入に縡を遂る是柔能剛を制す女の徳を常盤が清盛を和げゝるも子の成長を憑を爲のゝ俺你達織田家に送るも兄信長の心を和めて唯女子們の行季と計る処死る許りが貞女に非せ常盤の心を看做ひ給へと故事を引つゝ諭され々まで小谷の方は良人の諫めに死ぬにも死ぬ子故の闇漸會得ゝ

て伏沉く給ふ長政大きに歓びまろく女佐の臣藤懸三河守永勝木村
小四郎を輿添として小谷の方と三女子をば信長の方へ送り遣給ひ
ぬ小谷の方今年廿七歳此時當才の男子有りぬ信長方への聞へを憚り
て乳夫小川傳四郎清長並に近士中島左近介抱して同国長沢村の一
向宗福田寺に深く舎藏すると云元和元年大阪記に深井周防守と云り是なるべし

繪本石山軍記二編巻之三終